



No. 056

新・現代日本の作家たち  
アトリエ寫眞

Artist

池永康晟

いけなが・やすなり 1965年大分県生まれ。2009年銀座・ギャラリー  
1アトリエもとにて個展(同10年、13年、15年)。10年、11年アトリエア  
東京(ギャラリー1アトリエもと)、秋華洞(アトリエ)出品。12年第8回菅橋彦  
大賞展佳作賞二席・百花堂賞。12、13年花房観音著「明えいづる」萩花の雫  
(実業之日本社)表紙画担当。14年池永康晟展(新宿高島屋)、画集「君想ふ百  
夜の幸福」(芸術新聞社)発売。

Photo by

寫眞山下武

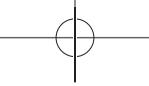
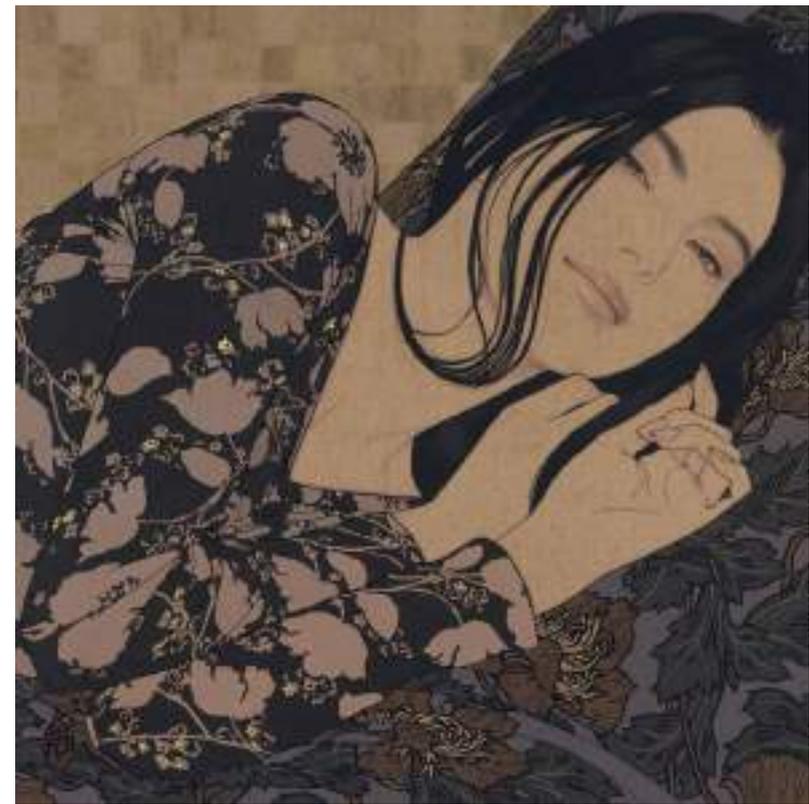


PHOTO of ATELIER



《誘蛾灯・沙月》 40×40cm 2017年 亜麻布、岩絵具、膠、墨、金泥

## 身辺抄

大泉のこのアトリエに越してきたのは去年の秋。二十代後半から四十代の半ばまで、早稲田の風呂なしのアパートにいて、随分長い間、銭湯通いをしてきましたので、画室に風呂がある生活がいまだに嘘みたい。当時は画を描く合間にバイトをしても食べられないので銭湯通いも余裕のある時だけで、普段は台所で入浴していました、最後にはとうとう流し台の底が抜けてしまいました…。

絵で何とかやっつけていけるようになったのは、ここ2、3年のこと。個展やグループ展だけでなく、画集を出し、美人画の展覧会を企画するようになって、あの頃とは生活がガラリと変わりました。自分もいつの間にか五十代になって、描く体験が「求愛」から「懇願」になってしまいました。絵に対する思いも変わってきましたけど、「絵画がプロダクトの中にいきいきと存在していた時代」がまた来るように、活動を続けられたらと…。



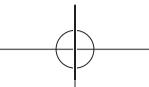
### 池永康晟展

会期 7月5日(水)～17日(月・祝)

10時～20時(金・土は20時30分、最終日は16時閉場)

会場 新宿高島屋 10階美術画廊

☎ 03(5361)1111(代表)



Mitsuei SAITO  
齋藤満栄  
—四季彩々—



富士とジャクナゲ 20号

# 花と風景の往還から深化した“花”

渡辺正

## 画家ならではのリアリズム

一昨年の再興100年を記念する日本美術院展で文部科学大臣賞を受賞したのは、齋藤満栄の《鉄線》だった。四曲の屏風いっばいに緑の葉むらと白あるいは紫がかつた花々を描いた、いわゆる花鳥画。だが、ひと味違う。何がどう違うか。装飾性を生かした花鳥画というより、齋藤作品に一貫するのはリアリズムだろう。違うというのは、齋藤さんならではのリアリズムがあるということだ。

たとえば2000年の第85回院展出品作。大観賞を受賞した《秋晨》にその特徴はより明らかだろう。画面右手に紅、左手に白の菊の群生を描くが、紅の菊はやや左に傾ぎ、白の菊はほとんど倒れかかるかのようだ。いや倒れはしない。紅白の花々はみずみずしさをたたえ、そのみずみずしさを

を支える茎を下方にたどれば、地に張ったたくましい根元が目に入る。全体を傾け、根元を露わにすることで、花の美の根源である生命力が強調されているのだ。菊花の姿はまた、端正な美しさを裏切るように花弁をうごめかせ、地に生えた命を謳歌するようでもある。ひとはそれを端的に「生き生きとしている」とも言う。

《鉄線》がその根元を隠されていて、屏風という装飾的な様式ではあっても、生き生きとしたリアリズムは失われていない。あるいは葉や花の合い間を縫うように顔を出す蔓やつぼみが、画面に生彩をもたらしているかもしれない。

では、どのようにそうした固有のリアリズムは培われてきたのか。

画家の来歴を探ったところでその因果のすべてが明らかになるわけではないが、ヒントにはなる。



デッサンの蓄積、《鉄線》に昇華

齋藤さんは1948年豊栄市(現新潟市)の塗装業を営む家に生まれた。商業高校に通うが、一度は新潟を出てみたい、東京へ出てみたいという思いを抱き、家族会議を経て一回限りの美大挑戦を許された。多摩美術大学に入学を果たし、退路を断つという思いから自身に関するすべての写真を焼いた。横山操、加山又造の薫陶を受け、美術団体とは距離をおいていた横山に院展出品の意向を告げると「巻き込まれてみる。それでも残ったものが本当の自分だ」と言われた。しかし連続20回、10年間落選を続け、33歳で初入選。この間堅山南風の内弟子から、堅山没後は松尾敏男を師と仰いだ。堅山からはそのデッサンの管理を任せられ、晩年目が衰えた師がお清新的絵を描ける秘密が、若い時からの写生の蓄積にあることを知る。折しもその頃、美大を卒業しても、いざ絵を描こうとして何も描けない自分に気づいており、風景のような漠然としたものではなく、目の前にある草花を正確に描く必要性と重要性に思い当たる。いまだ30代、体力と新潟人特有の根気には自信があった。自宅近くの京王百花園ほか、雨の日でもテントを張って根をつめた

が40代初めに体を壊し、デッサンへの欲を自ら戒めたことさえあった。

松尾には物心両面で支えてもらった。基本のデッサンに打ち込むために、あえて収入を得るための小品を描くことを止めた齋藤さんに、師は援助と理解を惜しまなかった。デッサンに手応えを感じるとともに、花の絵を主体とした作品で院展入選を順調に重ねていたある時、松尾から「花以外の作品を描くように」と言われ、鳥や風景の作品も出品するようになった。その中には我ながら不本意な出来の作品もあり、数年後「また花を描いて出品したい」とお伺いを立てると師は頷き「今度は今までと違った花になるでしょう」と応えたという。

齋藤さんの春と秋の院展出品作を通観すれば、先の松尾とのやり取りを裏書きするように、鳥や風景の作品が連続した時期もあるが、以降も意識的にテーマ、モチーフに取組む姿勢が見てとれる。もちろん今では自らの意思で風景画も出品する。むしろ秋の本展に限れば、ここ10年以上も花以外の風景作品などが続き、その中には海面を描いた《海日》(2007)や、滝を描いた《音》(2010)など、不定形モチーフの抽象と見紛う作品さえ交じる。穿った見方をすれば、院展100年に向

けた《鉄線》は、齋藤さんが満を持して出品したものとも思える。それほどに、花と風景の往還からさらに振幅を広げて進化、いや深化した「花」の作品だった。

さて、齋藤さんの新作個展が開かれるという。院展出品の大作が大樹だとすれば、個展の小品は大樹から収穫された果実のようなものだろう。いやそうあって欲しい。あるいは小品の「切り花」にも大地から育った命がこめられているかどうか。かつて齋藤さんの師でもあった横山操は、小品こそ作家の資質が問われることを知っていた。(美術ライター)

作家プロフィール  
1948年新潟県生まれ。72年多摩美術大学日本画科卒業。卒業後、堅山南風、松尾敏男に師事。79年再興第64回院展初入選。以後、同展を中心に活動。2000年再興第85回院展で日本美術院賞(大観賞)ならびに天心記念茨城賞受賞。06年院展同人に推挙。15年再興第100回院展で文部科学大臣賞受賞。現在、日本美術院同人。

四季彩々  
齋藤満栄日本画展  
会期 7月5日(水)〜11日(火)  
午前10時〜午後8時  
※5日(水)は午後3時、最終日は午後5時で閉場  
会場 あべのハルカス近鉄本店  
タワー館11階 美術画廊  
☎06(6625)2588(直通)



花菖蒲 8号



水仙 6号



鉄線 8号



バラ 6号

# 注目展の

Remarkable  
Exhibition

June 20

July 20

- ① 風凜の会
- ② 佐伯守美展
- ③ リアリズム・アンソロジーⅣ
- ④ 岩城大介展
- ⑤ 澗子
- ⑥ 飾団扇
- ⑦ 菊池円展

風凜の会 永井健志 松下雅寿 川又聡 — ぞごう横浜店

日本画の新旗手が渾身の新作を披露



川又聡 《銀風》 8号 日本画

新世代の日本画家として注目を浴びる作家の中でも、永井健志、松下雅寿、川又聡の三人は突出した人気を誇る存在と言えるだろう。ともに東京藝術大学および同大学院で日本画を学んだ3人は1978〜79年生まれ。同世代の作家として、スターラインからお互いの成長を見続け、切磋琢磨し合った「好敵手」とも言えるかもしれない。

透明感触れる色彩で「万葉の自然」を表現、観る者をいにしえの世界へと誘う永井。山河に宿る気韻生動を緊張感漲る画面に描き出す松下。そして、豹や虎、象や鷲などをモチーフに、圧倒的な迫力を持つ画面で存在感を示す川又。表現はそれぞれに異なるが、高い次元で日本画の可能

性を追求し続けている。展覧会では、この三人がすべての力を注いだ新作が披露される。



永井健志 《たまゆら》 10号 日本画

ながいたけし  
1979年東京都生まれ。2008年東京藝術大学大学院後期博士課程修了。2013年第1回桜花賞展館長賞、春の院展 春季展賞。日本美術院院友。

まつしたまさとし  
1978年宮城県生まれ。2010年東京藝術大学大学院後期博士課程修了。中美術展 東洋美術の未来を探る—日本画と工筆画(東京美術倶楽部)。日本美術院院友。

かわまたさとし  
1978年神奈川県生まれ。2010年東京藝術大学大学院後期博士課程修了。2008年第4回トリエンナーレ豊橋星野眞吾賞展入選ほか。無所属。個展多数。

## 風凜の会 永井健志 松下雅寿 川又聡

会期 — 7月11日(火)~17日(月・祝)  
会期中無休  
10時~20時(最終日は16時まで)  
会場 — ぞごう横浜店6階美術画廊  
☎045(456)5506(直通)



松下雅寿  
《晴気》 8号  
日本画

本江邦夫の  
「今日は、  
ホンネで」  
第110回

美術家

# 河口洋一郎

Yoichiro KAWAGUCHI

CG界のバイオニアが語る  
「サバイバルするためのアート」



作品を展示中の「アートはサイエンス」展の会場  
インスタレーション《Growth 宇宙船 船内へのおもてなし》とともに  
(軽井沢ニューアートミュージアム)にて。  
撮影：難波吾郎

今回のゲストは東京大学大学院教授で、世界的なCGアーティストとして活躍中の河口洋一郎氏。

1982年、自己増殖する造形理論「グロース・モデル」を元にした独自のCGアートを米国の学会で披露し、世界中のCG関係者から注目を浴びる存在に。以来、第一線でCG界をリードしてきた。種子島出身、自らを海洋性縄文人と称する異色作家が、未来のアートについて語る。

## 楽園と宇宙と未来型のアート

本江 種子島のご出身とか。  
河口 種子島生まれの、種子島育ちです。

本江 とてもユニークな場所ですよね。  
河口 ええ、特に生き物が変わっていると思います。ちょうどいま台湾で個展を開催中なんですけど、種子島と台湾は南西諸島でつながっていて、島伝いに辿ることができるんです。氷河期には本当につながっていたのかもしれない。黒潮の暖流もありますので、魚や野鳥、植物もとてもよく似ています。

本江 生物の分布で見ると、南西諸島の北限という位置なんですよ。

うね。「南国」に近いイメージなのででしょうか。

河口 南国というより「楽園」ですね。子どもの頃から庭にグアバとかパッションフルーツが自然に実っていて、食べ放題(笑)。海や海の生き物も身近でしたし、よく春と秋に渡り鳥の大群を目にしては、旅をする鳥たちの姿に感動していました。そういったことが生き物に興味を持つきっかけになっていることは確かですね。

本江 もうひとつ、河口さんと種子島を語るうえで欠かせない要素として「宇宙」がありますね。

河口 子どもの頃に宇宙センターができたのですが、身近にそういった最先端の科学施設ができたことによって、「将来、宇宙へ行く」というイメージを自然に持っているようになったと思います。

本江 鉄砲伝来からいきなり宇宙の島ですものね(笑)。種子島って歴史の大きな節目に登場するから不思議ですよ。アートへの関心も子どもの頃からですか。

河口 子どもの頃、父親がちょっと変わったトンボやカマキリの絵をよく描いてくれたんです。アーティストだったわけではないのですが、それがとてもアーティストティックに見えて、ずっと記憶に残っていたこ



《Shecco》 h40.0 × w55.0 × d40.0cm アクリル、鍍金



とはありました。ただ、どちらかというところ、探検とかサバイバルの方が面白くて、家の裏山に生えている竹で鮎を作って、ウツボとか海老を獲って晩御飯に食べた(笑)。リアルにそんな生活でした(笑)。

本江 その頃からワイルドだったわけですね(笑)。

河川 中学とか高校時代は宇宙に行くことを考えていましたので、とにかく大学は理科系に進もうと決めて、数学や物理を熱心に勉強しました。そんな時に工学と芸術を一緒に学べる九州芸術工科大学を知って、僕にはここが合っているかもしれないと。

本江 美大に進学しようとは思わなかった。河川 中学とか高校時代は宇宙に行くことを考えていましたので、とにかく大学は理科系に進もうと決めて、数学や物理を熱心に勉強しました。そんな時に工学と芸術を一緒に学べる九州芸術工科大学を知って、僕にはここが合っているかもしれないと。

## 河川さんは自ら「海洋性縄文人」と称されているように、とてもワイルドでユニークな発想の持ち主ですね。——本江

た？

河川 アートで食べていくイメージがわかりませんでしたし、世の中の動きと面白くやっていたためにどうしたらいいかとか、「宇宙探検」をするためにはお金が必要だろう

とか(笑)、前例がなくても自分にしかできないことをするしかないと思ったんですね。本江 フロンティア・スピリッツですね。河川 数学、物理、生物、化学、宇宙天文学



《Jecco》 h60.0 × w45.0cm アクリル、鍍金

などをベースにした未来型のアートは、自分にはイメージできない。それを具現化する方法を模索するしかないかと。

### 世界中のCG関係者から絶賛されたグロース・モデル

本江 なるほど、すべてはそこから始まったわけですね。ところで、河川さんはコンピュータ・グラフィックスを用いたアートの先駆者として知られていますが、大学時代からすでにCGを始めていたのでしょうか。

河川 日本に数台しかないコンピュータがたまたま大学に導入されました。ちょうど僕の学年の卒業研究のときだったので、本江にラッキーでしたね。1年違っていたら、CGの世界に進まなかったかもしれない。1975年頃のコンピュータでは画面に白い線を引くことぐらいしかできませんでしたが、何か新しい造形ができるんじゃないかと思いました。巻貝とか銀河のことな

らよく知っている、ならば螺旋をコンピュータでやってみたら面白いんじゃないかと。

本江 それが「カタチが生まれて、自己増殖する」という「グロース・モデル」の造形理論の元になっているわけですね。「5億年前の深海で発生した生物が成長し、次世代への遺伝を繰り返す、さらに5億年後にはどう進化しているのか、一連の流れを映像化してみたい」とインタビューで語っていたら「しゃいますけど、「グロース・モデル」の理論というのは、実に興味深いものですね。

河川 ただ、当時は参考にする手本も、教えてくれる人も誰もいませんでしたから、何もかも手探り。今はとても便利になりましたけど、あの頃は点をひとつ打つ、線を一本引くのが大変で、立方体が増殖するプログラミングをつくるのに1年かかっていた。今思うと本当に「暗黒時代」でした(笑)。

本江 当時のアメリカの状況はいかがでしたか？

河川 1979年に初めてアメリカのシググラフ(SIGGRAPH)に参加したのですが、コンピュータの画面に色が付いていたので、本当にびっくりしました。「海の向こうではエライことが起きています。これは大変だ」と。それで、何とか米国から安価なディスプレイを輸入して、またグロース・モデルのプログラミングをゼロからやり直して、何とか追いついてやろうと…。

本江 82年にシググラフで発表した「グロース・モデル」が世界中のCG関係者から絶賛されたと聞いています。衝撃のデビューを果たしたわけですね。

河川 「こんなユニークなCGは見たことない」と色々な方から評価されました、なかには「怖くて夢に出てきた」なんて人もいました(笑)。そのことがきっかけで、エドウィン・キャットマルやブノワ・マンデルブロとも縁ができました。欧米の世界

## 何億年もかけて進化してきた生き物の多様性の中に、未知の危機に対応するための鍵があると思います。——河川

から見ると、僕のCGは東洋的でとても斬新に見えたのでしょね。「20年は遅れている」と感じていたので、高い評価を得たことはとても励みになりました。本当に綱渡りの人生でしたから…。

本江 技術革新が目覚ましい時代ですから、色々な世界からスカウトされたのでは？

河口 お誘いはたくさんありましたが、やりたいことがあるなら、辛くてもブレてはいけないと。今はそれで良かったと思っています。

### サバイバルするためのアート

本江 そこが立派ですよ。今日初めてお話をさせていただきましたけど、河口さんは常に「最先端」を追い求める科学者であると同時に最先端のCGアーティストでもある。ダ・ヴィンチに近い存在といえるかもしれませんね。さらに自ら「海洋性縄文人」と称されているように、とて



《Shecco》 h60.0 × w90.0 × d90.0cm FRP

もワイルドで(笑)、ユニークな発想の持ち主とも感じました。ご自身の制作に関して、いまだのようなことを考えていらっしゃるのでしょうか？

河口 探検家としては、誰もやっていない分野に挑戦するほうが燃えますね。本江 というと、宇宙とかロボットになりますか。

河口 そうですね。あと5億年とか10億年後には、太陽が膨張して地球は燃え尽きてしまうと言われていきます。40億年、50億年後には天の川銀河が消滅するかもしれない。どんなに優れたアートだって人類が別の星に移住できなければ消えてしまう。そこで「サバイバル」という発想が生まれてくるわけです。

本江 なるほど、河口さんの立体作品には「サバイバル」してきた生命体の遺子が組み込まれている。だ

から、造形も5億年前、カンブリア紀の頃の生き物をイメージさせるものなんですね。

河口 宇宙で生き残るためにどんな適性が必要なのか…。たとえば火星と木星では、環境がまるで違いますが、何億年もかけて進化してきた生き物の多様性の中に、未知の危機に対応するための鍵があると思います。その遺伝子をアートの中に組み込んで、まずは立体にして、ゆくゆくはロボットにして宇宙に出る…。

本江 「サバイバルするためのアート」ということなんですよ。

河口 ダ・ヴィンチはアートとサイエンスをきっぱりと分けて考えていたと思います。一方、僕が思う自分の役割というのは、サイエンス側からこれまでになかったような

ートを開拓するということなんです。「自分が社会に対して還元できることは何だろう」と考えたときに、そういった答えが自ずと生まれてきた。それにコンピュータというのは、電源を切ったら終わりなんですよ。だから、ヴァーチャルだけじゃなくてリアルなものも残しておかなくちゃならない。自分が元気ならちに色々実験をしておくべきなんです。時間がいくらあっても足りないなあと…。

本江 東大を退官されたら、少し時間の余裕ができるかもしれませんね。ちょうど台湾に行く用事がありますので、展覧会を拝見したいと思います。今日は楽しいお話を有難うございました。

河口 こちらこそ、有難うございました。次回ぜひ展覧会の感想を聞かせてください。

### 対談を終えて 本江邦夫の「今日のホンネ」

「科学と芸術」ですぐに思い出すのは、ヘルマン・ワイルの名著『シンメトリー』である。フィボナッチ数列が出てきたことはよくおぼえているが、背筋を貫かれるような感動はなかった。「科学」と「芸術」が居住まいをただして向き合っている感じだった。

河口 洋一郎の科学的かつ芸術的ヴィジョン——「新造形力」は従来の模倣すべき自然ではなく、直筆のスケッチに根ざした異質の生物的形態素から自己展開・増殖し、いわば新種の「自然」を立ち上げていくところに最大の特徴がある。これは最新の「技術」というよりは思想、いやむしろ「理念」の問題ではないのか。遅れをとっていたCGの世界で彼があつという間に欧米に追いつき、ある意味で凌駕しえたのは種子島育ちの「海洋性縄文人」ならではの気宇壮大で雄渾な構想力のおかげである。対談後訪れた台北の現代美術館の大規模な個展会場に乱舞する、極彩色の異形のものたちに囲まれて、私はひたすら感動しつつ、今回の河口洋一郎との出会いをまるで天啓のように感じていた。

※1 シーグラフ(Special Interest Group on Computer Graphics SIGGRAPH):アメリカコンピュータ学会におけるコンピュータグラフィックスを扱う分科会。国際会議や展覧会の主催も。

※2 エドウィン・キャットマル(Edwin Catmull、1945年〜)、ウォルト・ディズニール・アニメーション・スタジオ及びピクサー・アニメーション・スタジオの現社長。コンピュータ科学者として、CG分野の発展に寄与。

※3 ブノワ・マンデルブロ(Benoit B. Mandelbrot、1924〜2010):フランスの数学者、経済学者。フラクタル幾何学の創始者として著名。

かわぐち・よういちろう 1952年鹿児島県生まれ。76年九州芸術工科大学画像設計学科卒業(現・九州大学)。78年東京教育大学大学院修士(現・筑波大学大学院)。75年より自己増殖する造形理論「グロース・モデル」をベースとした独自のアートを創造。世界的CGアーティストとして活躍。95年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家に選出。98年より東京大学大学院工学系研究科・人工物工学センター教授。2000年より東京大学大学院情報学環教授。10年米国ACM SIGGRAPH国際大会でデイスティングイッシュト・アーティスト・アワード受賞。13年芸術選奨文部科学大臣賞、紫綬褒章受賞。

もとえ・くにお 1948年愛媛県生まれ。76年東京大学大学院修士(現職)。2004年「オディロン・ルドン」で芸術選奨新人賞。おもな著作に『絵画の行方』『現代日本絵画』など。

### アートはサイエンス(Artis Science)

会期 開催中〜9月18日(月・祝)

火曜休館(8月は無休)

会場 KARUIZAWA NEW ART MUSEUM

長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢

1151-15

☎ 0267(46)8691

※軽井沢駅から徒歩約8分

入場料 一般1200円ほか。招待券プレゼント。

象嵌・彩泥  
佐伯守美の世界展  
— 日本橋三越本店

10年ぶり三越での個展で、  
近年の制作の集大成を



象嵌彩泥樹林文壺 径35.5×高さ27.4cm



象嵌釉彩夫婦湯呑 (20組限定)  
(右) 径7.8×高さ10cm  
(左) 径8.5×高さ10.6cm



象嵌釉彩樹林文鉢 45×33×高さ12.5cm



(右) 象嵌釉彩竹林文香炉 径10.6×高さ11.8cm  
(中) 象嵌幾何文筒 径11×高さ12cm  
(左) 象嵌釉彩桜文香炉 径11×高さ12cm

さえき・もりよし

1949年栃木県生まれ。父は彫刻家・佐伯留守夫。77年東京藝術大学大学院陶芸専攻修了。88年伝統工芸新作展奨励賞、国際陶芸展優秀賞、89年栃木県文化奨励賞、91年伝統工芸新作展東京都教育委員会賞、2002年益子陶芸展日本工芸会賞、07年新作陶芸展日本工芸会賞など受賞多数。現在、日本工芸会正会員、日本陶芸美術協会常任幹事

象嵌・彩泥  
佐伯守美の世界展

会期 — 7月12日(水)～18日(火) 会期中無休  
10時30分～19時30分  
(最終日は17時まで)

会場 — 日本橋三越本店  
本館6階 美術特選画廊  
東京都中央区日本橋室町1-4-1  
☎03(3241)3311

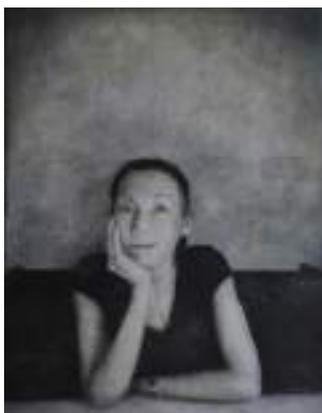
四季折々の自然の表情を、卓越した象嵌技法によって表現する実力派・佐伯守美。のびやかに枝を広げる樺の樹林、満開に咲き誇る桜、幾何学的な美を感じさせる竹林……描かれる風景は多彩かつ多様、だが一方で、そのどれにも泰然と播るがぬ生命の力強さを想起させる深遠な魅力がたたえられる。

そんな作家が、日本橋三越では10年ぶりとなる個展を開催。「この10年の集大成」として(佐伯)」と語るように、これまでの表現をより緻密に、より洗練させ、より完成度を高めた壺や鉢、花器などを中心とした発表となる。さらに、より絵画的な表現を追求した陶板作品や、サイズ以上に豊かさを感しさせる香炉や酒器、限定20組の夫婦湯呑などまで、予定出品数はなんと200点以上！大ボリュームによる展示でその世界を堪能できる。

# リアリズム・アンソロジーⅣ

あべのハルカス近鉄本店

大阪で写実絵画を  
盛り上げてきたグループ展  
今回は、若手による  
多彩な表現を中心に



安富洋貴 燭灯 6F



小林宏至 そこにいる 4P



久保尚子 静物/箱 6M



三嶋哲也 Mellow line 20号変形



山本雄三  
温もりを感じながら  
(制作途中)  
3S

### 【出品予定作家】

浅村理江 / 久保尚子 / 小林宏至 / 藤井路夫 /  
三嶋哲也 / 光元昭宏 / 安富洋貴 / 山本雄三ほか

## リアリズム・アンソロジーⅣ

会期 — 6月28日(水)～7月4日(火)

会期中無休

10時～20時(最終日は17時まで)

会場 — あべのハルカス近鉄本店

タワー館11階 美術画廊

大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43

☎06(6624)1111

いまや写実絵画ブームは全国的な現象となっているが、近年とみにその関心が高まっている地域が大阪だ。同地の百貨店や画廊でそうした展覧会が開催される頻度や、紹介される作家の世代の幅広さなどから、そのことがうかがえる。

その盛り上がりに一役かかってきた展覧会が2014年から開催されてきた「リアリズム・アンソロジー」。これまで様々な作家を紹介してきた同展だが、今回はとくに次世代作家の紹介の側面が強い。細密描写による異空間の描出で独立展の中でも個性際立つ山本雄三や、徹底した現場主義で濃密かつ鮮烈なリアリズムを創出する三嶋哲也、鉛筆によるモノクローム描写で静謐な実在感を追求する安富洋貴ら60～70年代生まれの作家たちから、妖艶な空気をまとった人物画表現が魅力の小林宏至、静物画のモチーフ構成に新たな可能性を拓く久保尚子、家族や身近なおもちゃなど親密なモチーフで独自の絵画世界を生み出す浅村理江恵らの新鋭まで、写実絵画に新風を吹き込む多様な表現の数々が揃う。



Yukito NISHINAKA

## 西中千人

そのガラスアートは、  
「宇宙」をリアライズするために

日本橋高島屋1階正面ホールにて、5月31日～6月20日に展示された〈一瞬に煌めく永遠～ガラスアートの瞑想空間へ〉。起立する大小17点のガラスのオブジェは、リサイクルガラス（よく見ると再生前のガラス製のディテールが残っている箇所も）できており、その事実が観る者に「地球資源の循環型社会」についての思いを触発するものともなっている。 撮影：森健児（p.96も）

### 特別対談

#### ゲスト 古藤俊一（有人宇宙システム株式会社代表取締役）

去る5月31日、日本橋高島屋のエントランスに表れた〈一瞬に煌めく永遠～ガラスアートの瞑想空間へ〉。光り輝く大小17点のオブジェが天へのび、その根本からミストが静かに漂う神秘的な光景。見る者のイメージネーションを喚起し、はるか「宇宙」へと飛翔させるこのインスタレーションを実現したのが、ガラスアーティスト・西中千人。作家はいかにしてこの作品を構想し、その先に何をみつけたのか？ JAXAなどで活躍する宇宙事業のエキスパート・古藤俊一氏が、西中作品と「宇宙」との関係を解き明かす。

（構成・米谷紳之介）

太陽と月の関係のように、  
アートは人の心に反射して輝くもの

西中 古藤さんは私に「アーティストに必要なのは世界観ではなく、宇宙観なんだ」と示唆してくれた方です。一度、膝を交えてじっくりお話をしたいと思っていました。初めてお会いしたのは10年ほど前ですよ。

古藤 横浜高島屋で、たまたま西中先生の個展を見たのがご縁ですが、会場の入り口にあった《MADO》というタイトルのガラスオブジェに心をわしづかみにされました。真ん中が少し透けて見え、そこを覗くと、中には星がいくつか輝いているんですね。それはまさに私にとっ



《MADO》1996年 38×19×高さ52cm ガラス、鋳造

ての宇宙でした。

西中 古藤さんが星に見えたのはガラスの気泡ですよね。従来のガラス作家は鑄込みの段階で、できるだけ気泡をつくらないようにします。一般的に、そのほうがきれいだとされているからです。でも私はそれが嫌でした。むしろ気泡も自分の表現として見せたかった。子どもの頃、夏になるとよく海に潜ったんですが、真つ青な海の中には無数の気泡が踊っていました。その美しさは私の原体験です。さらに夜の星空。田舎でしたから、満天の星の美しさは記憶として刷り込まれています。現在の私の工房も周囲に建物は少なく、夜は暗いので、無数の星が見えます。

そうして私の意識の底に横たわっていた宇宙への想いが、古藤さんの「この作品は宇宙だ」という言葉で目覚めた気がします。

古藤 私も田舎の山育ちですから、少年の頃から夜空の星を眺めるのが大好きでした。それが人工衛星の開発の道に進むことになった原点です。残念ながら、私は宇宙飛行士ではないので、宇宙へ出ていくことはありませんでした。しかし、気象衛星から送られてきた写真などを見るとときは、自分が衛星にいて、宇宙から地球を見ているような感覚なんですね。西中先生の作品もそうです。自分が今、宇宙空間に浮かんでいるようなイメージでガラスの世界を見ることでできます。

西中 そこなんです。宇宙もアートもどれだけ自分のこととして捉えられるかが重要です。今は宇宙なんて自分とは関係のない、空想の世界に響き続けているのだと思います。

古藤 考えてみれば、人間に限らず、この世に存在するものに「永遠」はありません。宇宙は誕生して138億年ほどだと言われます。そして、地球の年齢は現在約46億歳。私はあと10億年くらいは大丈夫じゃないかと漠然と考えていますが、どうなるかは誰も分らない。いずれにしても、いつか太陽はなくなるだろうし、地球も太陽とともに爆発して消滅してしまうはず。西中 爆発後にその破片が集まり、新たな恒星が生まれるかもしれない……私はつい「呼継」と結びつけて考えてしまいます(笑)。

古藤 まさしく「輪廻転生」ですね。そのような宇宙観を理屈ではなく、直観的に伝えるのがアートの力かもしれないですね。

西中 今回、日本橋高島屋一階のエントランス

にしな・ゆきと

1964年和歌山県生まれ。88年星薬科大学薬学部卒業。91〜94年カリフォルニア芸術大学でガラスアートと彫刻を学ぶ。98年ニシナユキとGLASS STUDIO設立。主な受賞に97年第1回「現代ガラスの美展 STUMBO」大賞、13年「CREATIVE HACK AWARD 2013」グラフィック賞など。個展は04年以降毎年高島屋各店で開催。そのほか14年古川美術館分館 三郎記念館などで多数。Asian Art in London、COLLECT (ともにロンドン)、S O F A (シカゴ、ニューヨーク) など海外のアートフェアやグループ展への出品も多数。



こう・としかず

1950年福岡県生まれ。75年九州大学大学院工学研究科修士、同年宇宙開発事業団(現JAXA)に入社。以来、気象衛星「ひまわり」を手始めに多数の人工衛星の開発に従事。2011年に執行役を最後にJAXAを退職、同年有人宇宙システム株式会社(JAMS)に入社。12年より代表取締役社長(現職)。

に「一瞬に煌めく永遠」ガラスアートの瞑想空間へ」と題したインスタレーションを展開したのも、「循環」や「輪廻転生」について私なりに提案したかったからです。

古藤 リサイクルガラスが使われているそうですね。

西中 日本耐酸壘工業<sup>※</sup>というガラス壘を製造している会社に全面的な協力を仰ぐことで実現したプロジェクトです。この会社の協力がなければ、巨大なガラスオブジェを作ることはできなかったし、展示するからには見る人に持続可能な未来について考えてもらう契機にしたかった。というのも、現在、ガラスのリサイクル率は約70%。水が大地と川と海の間を循環しているように、ガラスも再利用を繰り返しながら人間社会を循環しています。

もちろん、この作品から何を感し、何を想像するかは見る人の自由です。古藤さんは何を感じられましたか。

古藤 やはり宇宙ですね。小さきままな、まるで生命体のようなガラスが宇宙に向かって伸びようとするエネルギーを感じます。

「月にインスタレーションを」  
宇宙をリアライズするためのアートへ

西中 少し初歩的なことを聞きますが、宇宙とはどこから先を言うのでしょうか。

古藤 実は空と宇宙の明確な境界はないんです。一般的なには空気がほとんどなくなる、地上

界だと考えている人が多い。アートに対しても同様で、作者は有名なのか、価格はいくらかのかという程度の関心しかない人がほとんどです。つまり、アートを身近なものとしては捉えていません。それはアートが人の心に届いていないからでもあるんですね。最近、私は、アートは夜空に浮かぶ月の光のようなものじゃないかと考えています。

古藤 月は自分で光を放つわけではなく、太陽の光を反射して輝いているわけですが。

西中 アートもその作品自体が見る人の心を揺さぶり、そのエネルギーを反射することで、より光り輝くのだと思います。その光が混沌とした時代や社会を照らす——それが真のアートだと思うし、私がつくりたいのもそんな作品です。

「呼継」も、リサイクルガラスでの制作も、  
恒星の「輪廻転生」に通じるものとして

古藤 作り手の精神が問われるのでしようね。近年、取り組まれている「呼継」のシリーズには西中先生の「ガラスは割れる、人は死ぬ、だからこの一瞬を生きる」というメッセージが明確に表われていますね。

西中 今でこそ「金継」という手法は広く知られているし、割れたり、ヒビが入ったりした器の美しさも理解されています。けれど、今から400年ほど前に、初めて「呼継」や「金継」をやったときはどうだったのか。私はそこを考えますね。桃山時代あたりに、茶人でもある武士が始めたのでしょうか、もし、お披露目のお茶席でその器が

から約100 km先を宇宙としています。地球の半径は約6400 kmですから、空気に覆われている層は非常に薄く、デリケートなことですね。だから、そこに暮らす人間の活動で温暖化も生じます。

西中 現実には宇宙から地球を見るような体験をしたら、ものの見方、考え方が変わるような気がします。

古藤 よく言われるのは宇宙から見た地球には国境がないということですね。国と国が争うこととの愚かさも見えるのでしよう。アポロ計画に参加した宇宙飛行士の多くが精神世界や宗教に目覚めたのも、彼らにしか知覚できない世界がそこにあったからだと思います。

西中 宇宙を体感するというのは自分の心の奥を見ることなんですよ。私も可能であれば宇宙に行ってみたくは、実はそこでアートを展開できないものかと本気で考えています。もっと具体的に言うと、月で何かやってみたいんです(笑)。

古藤 いかにも西中先生らしい気宇壮大な発想ですね。

西中 今はすべてがバーチャライズされてしまっていて、リアルな手応えがどんどんなくなっていく時代じゃないですか。あるいはインターネットによって誰もが情報を容易に手に入れられ、スマホ一つで何でもわかったような気分になれます。しかし、膨大な情報に囲まれ、バーチャルな世界に浸っているせいで、未知のものを受け入れられなくなっている。未知に対する

※日本耐酸壘工業株式会社は、岐阜県大垣市で創業86年を迎えるガラス壘製造会社。現在400種類ほどのガラス壘を製造、ドリンク壘に換算すると年間約13億本を供給する。同社はガラス壘による循環型社会の実現を目指し、リサイクルをスピードアップするための独自のプロジェクトを推進している。



《転生 石激》 16×12×高さ41cm ガラス、宙吹き



《ヒカリ包む》 14.5×13.5×高さ35cm ガラス、鈎造



《転生 荒海》 48×48×高さ19.5cm ガラス、宙吹き



《転生 縮》 19.5×19.5×高さ26cm  
ガラス、宙吹き

6月21日より開催される個展出品作より。

作家の代名詞である「呼継」シリーズに循環をテーマにしたオブジェも加え、全60点が出品される予定。

西中千人ガラス展  
「破天」―天をも破り、未踏の地へ  
会期 6月21日(水)～27日(火)  
10時30分～19時30分(最終日16時まで)  
会期中無休  
会場 日本橋高島屋6階美術画廊・美術工芸  
サロン  
東京都中央区日本橋2-4-1  
☎03(3211)4111

西中 資金はクラウドファンディングで幅広く集めたんですね。より多くの人に関わってもらうことが、アートと宇宙それぞれの関心を高めることになると思うからです。

アートも宇宙開発も、いつまでも閉ざされた世界で、限られた人だけのものであっていいはずはありません。このプロジェクトにはそんな状況を劇的に変える力があると信じています。

古藤 いやあ、面白いなあ。ぜひ私にも協力させてください！

感性が鈍っていると書いてもいい。そして、この時代に残された最大の未知とは宇宙です。だからこそ、私はその未知なる宇宙にリアルな現実、本気の現実をぶちかまし、この時代に風穴を空けたい。

古藤 今そんなことを考えているアーティストはまずいないでしょう。その意味では最初に手を挙げた者勝ちですね(笑)。

西中 そこで古藤さんにお聞きしたいんですが、実際に月にアートを展示することは可能なのでしょうか。

古藤 すでに宇宙開発は冒険の段階からビジネスの段階へと移行しています。民間人に乗せた宇宙船が定期的に月へ行くようになるのはまだ先の話ですが、西中先生のご提案は十分可能だと思います。

ミッションとしては、無人ロケットを打ち上げ、作品を収納した飛翔体を月の近くまで運び、落下させて月面に到達させる、というものになるでしょう。これくらいは現状の技術でも問題ありません。ただし、作品が壊れ、思ったような展示ができないかもしれません。

西中 むしろ、そのほうがいいですね。ハブニングもアートですから(笑)。

古藤 問題はその資金をどうやって調達するかですね。



吉間春樹 《agora 8.1》 53.0×45.5cm パネルに油彩

第1回 *Zephyr*

2017年6月23日(金)～7月1日(土)  
10:30-18:30 日曜休廊

上田治希 小椋喜公 瀬尾佑佳 中道佐江  
西脇忠 山本周 吉間春樹  
(賛助出品) 生島浩 大路誠 小森隼人 阪東佳代



山口暁子 《こえをさく》 12P 麻紙、絹本着彩

山口暁子展 “*Letters*”

2017年7月11日(火)～22日(土)  
10:30-18:30 日祝休廊



〒104-0061  
東京都中央区銀座 3-7-20 銀座日本料理会館2F  
TEL03(5159)7402 FAX03(5159)7403  
<http://www.artmorimoto.com>

瀬子(阿部清子・佛淵静子二人展) — Gallery Suchi(茅場町)

日本画における墨の「線」、その根源的魅力へ迫る女性画家の競演



佛淵静子 シグナル 8P 麻紙、墨、胡粉、岩絵具、プラチナ泥

あべ・きよこ

1970年東京都生まれ。93年臥龍桜日本画大賞展入選。98年中国南京市、2001年長崎県雲仙市、02年沖縄県那覇市、04年兵庫県淡路島にそれぞれ滞在。個展、グループ展多数。2010、11年アートフェア東京への出展なども。

ほとけぶちしずこ

1974年東京都生まれ。2000年多摩美術大学大学院修士課程美術研究科日本画修了。07年臥龍桜日本画大賞展入選。09年昭和会展招待、多摩美術家協会展招待。個展、グループ展多数。



阿部清子 突風 10P 楮紙、墨、岩絵具

瀬子(阿部清子・佛淵静子二人展)

会期 — 7月21日(金)~8月5日(土)

日曜、月曜休廊

11時~19時

会場 — Gallery Suchi

東京都中央区日本橋

茅場町2-17-13 第二井上ビル2F

☎03(6661)6393

「日本画」とは何か？ その美術史的な定義や概念をめぐる論争は過去さまざま繰り広げられてきたが、少なくとも千数百年間にわたって日本絵画の美点として連綿と受け継がれてきたものに、墨による「線」の表現の豊かさがあることは間違いないだろう。

ただ、現代の日本画シーンにおいてそれを感じさせる作家は決して多くはない。若手世代ではなおさらだ。そんな状況下だからこそひとときを輝く存在が、阿部清子と佛淵静子。前者は、時に力強く濃密に、時に柔らかく淡麗に、変幻自在の描線によって人物の心の陰影、脈動する生命の動静までを描き切る。後者は、繊細かつ端正ないっさいの無駄のない白描で、楚々とした透明感に満ちた絵画空間を創出し、そこに微かな心のゆらぎを表出させる。

最初に述べた墨による「線」の表現、それに特化した作家同士の競演となる本展は、日本画の根源的な力を再認識できるものとなるはずだ。それぞれ5〜6点を出品予定。

飾団扇 — ギャラリーマロニエ(京都)

人気の日本画家9名が、「京うちわ」をみやびに彩る



上から、  
中村美希 花実咲き  
石橋志郎 天  
後藤吉晃 赫



岩崎絵里  
めでたい めでたい



上から、  
佐々木真士 月桃  
久野隆史 海  
長谷川雅也 夏の音



秋野亜衣 グロリオサ



吉田潤 左馬

【出品作家】

秋野亜衣 / 石橋志郎 / 岩崎絵里 /  
久野隆史 / 後藤吉晃 / 佐々木真士 /  
中村美希 / 長谷川雅也 / 吉田潤

飾団扇

会期 — 7月4日(火)～16日(日) 月曜休廊  
12時～19時(日曜は18時まで)

会場 — ギャラリー マロニエ  
京都市中京区  
河原町四条上ル塩屋町  
☎075(221)0117

本展はそんな「阿以波」のうちわと京都の日本画家9名がコラボレーションした注目の企画。同地の新世代をけん引する人気作家・岩崎絵里の呼びかけで集った30〜40代の同世代の気鋭が、それぞれのセンス全開で老舗の名品と向き合う。「京都という、伝統的な仕事や職人さんに恵まれている土地ならではの繋がりを活かした仕事を大事にしたい(岩崎)」との思いがこもった作品18点が一堂に。価格的にも意外とリーズナブル。この機会にゼヒ!

元禄二年(1689年)の創業以来三百余年の歴史をもつ老舗「京うちわ阿以波」。その看板商品は、丹波の竹に越中八尾の和紙を張り、そこに洒脱な意匠を施す「飾りうちわ」。持ち手、型の多様な組み合わせや、繊細で涼やかな透かしなど、風流なたたずまいは京都の夏をみやびに彩ってきた。